

## 一つだけの命

たけむら

さな

竹村 紗南

家の棚を整理していると、偶然小学四年生の時の国語の教科書が出てきた。「懐かしい」なんて思っページをパラパラめくると、「一つの花」という戦争をテーマにした物語を見つけた。この物語は「一つだけちようだい」が口ぐせのゆみ子という女の子の話だ。食べ物が少ない戦時中の日本で、配給されたわずかな食料で食いつないでいたゆみ子の両親。いつもお腹を空かせていたゆみ子は「一つだけちようだい」と食べ物を欲しがる。そんなゆみ子に両親は「一つだけよ」と言い、自分たちの分からゆみ子に分けてあげていた。この物語はまさに「いのちの尊さ」を教えてくれる素晴らしいものだった。戦争に行くゆみ子のお父さんは、見送りに来たゆみ子に一輪のコスモスを渡す。そして、「一つだけのお花、大事にするんだよ」と言った。どうしてお父さんは、いつも「もつと、もつと」と欲しがるゆみ子に、最初からたくさんのお花を渡さなかったのだろうか。

それは、お父さんが、ゆみ子に「一つだけ」の大切さを教えたかったからだと思う。「一つだけ」というのは他に代わりがきかない。だから人は一つだけの物を特別だと考え、大切にしよう。一つだけの花、つまり一つだけの命を大切にしよう。そんな思いがこの物語には込められている。

戦争は「一つだけ」を殺す。一つだけの家、一つだけの家族、一つだけの学校。人のかけがえのない「一つだけ」を大切にしない。他に代わりがある、ただの消耗品だと思っている。私たちは、ゆみ子と同じように何でも山ほど欲しがる。どんなにくさん与えられても満足しない。それは、国が貧しいからではない。心が貧しいからだ。本当の平和な時代を築いていくには、かけがえのない「一つだけ」の命を大切にすることが重要だと考えた。世界の人々の「一つだけ」がいつまでも続くような世の中になることを願っている。